

令和元年5月13日現在

機関番号：32663

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13560

研究課題名(和文)ハンガリーの中国系の子どもにみるトランスナショナリズムに関する教育人類学的研究

研究課題名(英文)An Educational Anthropological Study of Transnationalism among the Chinese Children in Hungary

研究代表者

山本 須美子 (Yamamoto, Sumiko)

東洋大学・社会学部・教授

研究者番号：50240099

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ハンガリーにおける中国系の子どもを取り上げて、文化人類学的調査に基づいた親や中国系コミュニティを含む多角的視点から、中国系の子どものトランスナショナルな教育経験と進路選択の実態、及びその背後にある諸要因を明らかにすることであった。中国系の子どもにみるトランスナショナルな進路選択のあり方は、兄弟間でも異なり、親の社会経済的背景や中国系コミュニティ内の口コミ、子どもの国籍や成績等の要因が背後にあり、多様性を生み出していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではハンガリーの中国系の子どもにみるトランスナショナルな進路選択の多様性と、それを生み出す諸要因を明らかにした。そこでは、主流社会の学校に適應することがトランスナショナルな進路選択に結びつく場合もあった。

本研究を通して、教育におけるトランスナショナリズムをめぐる問題は、学校への適應・不適應によるホスト国への統合をめぐる問題と複雑に絡み合っていることが明らかになった。EU諸国の移民の子どもの教育やアイデンティティ形成を把握する上では、統合とトランスナショナリズムの両者を視野に入れなければならない点を実証的に明らかにした点に、本研究の意義がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate the transnational educational experiences and career choices of the Chinese children and to identify the factors behind them, based on an anthropological fieldwork including the perspectives of parents and the Chinese communities. The study revealed that the transnational career choices of the Chinese children differed among siblings and were affected by factors such as their parents' socio-economic background, word-of-mouth communication in Chinese communities, their nationality, and their academic performance. This resulted in a diverse range of career choices among the Chinese children in Hungary.

研究分野：教育人類学

キーワード：トランスナショナリズム EU 中国系移民 ハンガリー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1989年の天安門事件が引き金となったハンガリーへの中国人の大量の流入は、東ヨーロッパで最初の中国系コミュニティを形成した。2004年にEU加盟を果たしたハンガリーは、EUの周辺国である。最多の移民集団となった中国系移民の子どもは、ハンガリー語を教授語とする正規の学校だけではなく、ハンガリー語と中国語や英語の公立や私立のバイリンガル学校、中国や他国への留学など多様な学校選択し、トランスナショナルな生き方を模索している。

2. 研究の目的

本研究は、ハンガリーにおける中国系の子どもを取り上げて、文化人類学的調査に基づいた親や中国系コミュニティを含む多角的視点から、中国系の子どものトランスナショナルな教育経験と進路選択の実態、及びその背後にある諸要因を明らかにすることを目的とする。それは、移民の子どもの教育問題を、正規の学校への適応・不適応によるホスト国への統合をめぐる問題から、教育におけるトランスナショナリズムをめぐる問題へとパラダイムシフトさせる。

3. 研究の方法

中国系の子どもが多い学校や中国系補習校における授業の参与観察や教師へのインタビュー、中国人の親への子どもに対する考え方に関するインタビュー、及び20代を中心とする中国系の若者へのライフヒストリーを構成するインタビューから成る文化人類学的調査を実施した。

4. 研究成果

(1) ハンガリーにおける2000年代の中国系人口は約10,000人から15,000人で、全人口の約1%~1.5%を占め、非白人人口約100万人の内、中国系移民は最も人口が多い移民集団となっている。イギリスやフランスの中国系人口は各約60万人といわれるのに比べれば、ハンガリーの中国系人口はかなり少なくマイナーな存在である。

ハンガリーの中国系移民はブダペストに集中しているが、ブダペストにロンドンやパリのようなチャイナタウンと呼ばれる中華レストランや中国雑貨店が立ち並ぶ地区はない。その代り、中国人が集住し卸売業を営む中国マーケットがいくつかある。1980年代にオープンした最大の中国マーケットであったフォータイガー・マーケットは、質は良くないが低コストの商品を提供し、日用品を売る小さな店が密集し、地元の人々で賑わっていたが、ジェントリフィケーションの進行によって2014年に閉鎖された。このマーケットの位置する8区(Józsefváros地区)は、中国系人口がブダペストで最も多い地区である。現在のブダペストにおける中国マーケットとしては、フォータイガー・マーケットの反対側にユーロ・スクエア、ユーロ・スクエアからバスで10分程の場所にモノリ・センター、北東部郊外15区には近代的なビルの中にあるショッピング・モールとしてアジア・センターがある。これら中国マーケットによって、中国系移民は可視化されていることがわかった。

(2) ブダペストには、中国系の子どもが週末に通う補習校が3校あるが、先行研究では明らかにされたことはなかった。3校の設立母体は、中国系アソシエーションではなく、教育レベルの高い中国系移民個人であった。土曜日と日曜日に6,7時間開校している。イギリスやフランス、オランダの中国語補習校は、ほとんどが土曜日か日曜日に2,3時間開校しているのに対して、ハンガリーの場合、学校のない週末に子どもを放っておきたくないという親や校長の意向が、長時間の開校となっている。中国語(マンダリン)だけではなく、数学や英語も教えられていた。中国とイギリスの有名大学に進んだ補習校に通った経験のある若者へのインタビューから、補習校はトランスナショナルな進路選択に役立つかどうかでその役割が判断されていることが明らかになった。

(3) 2000年代初期にはハンガリー生まれ育ちの中国人の子どもが増えていたが、現在ではごく少なくなっている。現在ブダペストの学校でその存在が目立っているのは、特にこの3年間で中国から来た10代前半の子どもであり、2つのカテゴリーに分類できる。第一は、中国から親の仕事の都合や投資永住権制度によって、両親、あるいは母親とブダペストに移住した子どもであり、第二はハンガリー生まれで10歳位まで中国の祖父母の元で育ち、その後でブダペストの両親に合流した子どもである。その理由は、2012年末からの投資永住権制度によって中国から移住した者が多かったこと、ハンガリー生まれで中国に送られずハンガリーで教育を受けている子が少ないことが考えられる。10代前半で中国から来た子どもは、ハンガリー語にも英語にも問題を抱えていた。

(4) 中国系の子どもの通う全日制学校の選択肢は4つに分けられる。第一はハンガリー語を教授語とする公立学校である。ハンガリーの公立学校では、ハンガリー語が話せない子どもの統合のための特別な措置は取られず、教師個人の援助に頼っている。ハンガリー語のレベルによって、学年を下げて入学させる。学力レベルを示す学校リストがあるが、高い学力レベルの公立高校に入学した中国系生徒は少数であり、そのような生徒は高校入学前にハンガリー語を教授語とする学校に通った子どもであった。

(5) 第二の選択肢は、ハンガリー語と中国語の公立バイリンガル・スクールであり、ヨーロッパには中国語とヨーロッパの言語の全日制的バイリンガル学校はこの学校しかない。学校の果たす機能が、2004年の設立当初のハンガリー育ちの中国人の子どもに母語である中国語や中国文化を教えることから、ハンガリー人の子どもに外国語としての中国語を教えることに変化していた。

筆者がインタビューを実施したハンガリー人の副校長によれば、この学校は中国文化や中国語を中国人の子どもに教えるために設立されたが、2008年の北京オリンピックを機にハンガリーで中国語の人気の高まり、外国語として中国語を教える需要が高まった。それゆえ2008年以降は、主にハンガリー人生徒に外国語として中国語を教えられるようにカリキュラムが改訂された。2018年現在で小学校レベルの生徒数は約450人、中国人が約3割で、他はハンガリー人やその他の子どもである。

近年この学校に多い中国人の子どもは10歳位で中国から来た子どもであり、設立時に多かったハンガリー生まれ育ちの子どもはごく少ない。注目すべき点は、ハンガリー語をある程度マスターするとほとんどの中国人の子どもが退学することである。中国人の親は、子どもが中国語しか理解できないので、中国語も学べるこの学校が適していると思い子どもを入学させるが、ずっと通わせようとはしない。ハンガリーの公立学校に通わせただけがハンガリー語が上達すると考えている。中国人の親にとっては英語を子どもに学ばせることも重要であるが、この学校では第10学年からしか学べないことも中国人の親が子どもを転校させる理由である。中国人の親はハンガリー人の親に比べて子どもの勉強への期待が高かった。対照的にハンガリー人の子どもは中国語の学習を継続したいので退学する子どもはおらず、高校が設置されたのもそのため、高校の生徒はほとんどがハンガリー人であった。

(6) 第三の学校選択肢は、英語とハンガリー語のバイリンガル・スクールである。

1909年に小学校として設立された長い歴史を持つ公立バイリンガル高校では、2018年現在、生徒数約600人、外国人生徒は約50人でその内中国人が約30人である。4年前は中国人生徒は1人だけであったが、その後急速に増加した。中国人生徒は、ほとんどが英語初級クラスにいて、10歳位で中国からハンガリーに来て1~3年くらいである。数学や化学、歴史などは英語で、美術や音楽、体育、情報はハンガリー語で学ぶ。教師によると中国人生徒の中に、欠席や遅刻、教師の敬意を払わない、暴言、宿題をしない、授業中の態度が悪い等の問題を抱える者がいるとのことであった。

ハンガリーのナショナル・カリキュラムと評価システムに沿った政府承認を受けた私立バイリンガル・スクールは、幼稚園、小学校と高校がある。ブダペスト5区と中国系移民が多い8区に校舎がある。3年前に中国語新聞に学校の広告を出して以降、幼稚園から高校まで中国人の子どもが増えた。2018年現在の小学校の全生徒は172人であるが、ハンガリー人が85人で中国人が31人、次に多いのがトルコ人8人、シリア人6人である。ハンガリー生まれで、10歳位まで中国の祖父母の元で過ごし、ハンガリーに来て1~3年の子どもが多い。外国語としてのハンガリー語授業と共に、主要科目は英語で学ぶが、数学はハンガリー語で学んでいた。1年間の英語準備コースがあることが特徴で、第5学年以降で中国からハンガリーに来た子どもは準備コースで英語を学んだ後で各人に見合った学年に編入していた。第1学年から第4学年では、基礎科目はハンガリー語で教えられ、教科の6割が英語で、第5学年から第8学年では教科の8割が英語で教えられる。高校では教科の9割が英語で教えられ、ハンガリーのバイリンガル国家試験を受けることができる。中国人生徒の中には、英語力が低くとも数学で良い成績を取ってハンガリーの大学の医学部に進学した者もいたが、多くの場合、高校卒業時の最終試験に合格はするものの、成績は良くなかった。

(7) 第四の学校の選択肢は、英語を教授語とするインターナショナル・スクールである。ここでいうインターナショナル・スクールとは、民族や国籍を問わずに外国籍の子どもたちを主な対象とする私立学校で、ハンガリーの教育システムとは関連がない。ブダペストで中国系の子どもの通うインターナショナル・スクールには、アメリカ系、イギリス系、オーストリア系、トルコ系、そして中国系教会の運営するインターナショナル・スクール等がある。授業料は高く年間200万円以上である。教授語は英語で、英語のできない子どもに第二言語としての英語の補習教育も提供している。

1996年に設立されたイギリス系インターナショナル・スクールは、イギリスのナショナル・カリキュラムに基づくだけでなく、ハンガリー人生徒向けにハンガリーのナショナル・カリキュラムに対応したコースも併設していた。近年親の転勤や投資永住権獲得によって中国から移住してきた中国人生徒が、英語を中心に学んでいた。

(8) 近年中国からブダペストに移住した親5名へのインタビュー調査から、親はブダペストの生活を気に入っていて、一人以外は今後もブダペストで暮らそうとしていたが、子どもには他国の大学に進学し将来的にハンガリーで暮らすことを望んでいなかった。そのためには、親は5名とも英語教育を重視し、子どもを英語補習校にも通わせていた。しかし、中国人の親は、子どもに高等教育からトランスナショナルな進路を望む一方で、子どもの成長にはハンガリー

語を習得しハンガリーの学校に適應していくことも大切であると捉えられていることがわかった。一部の高学歴でハンガリーの学校事情に詳しい中国人の親は、学力という点では、ハンガリーの公立高校の方がインターナショナル・スクールより上であると認識し、海外の有名大学に子どもを入学させるには、トップレベルのハンガリーの公立高校に入学させるのがよいと考えていることがわかった。

(9) 10代で中国からハンガリーに来た子どももハンガリー生まれの子どもも、英語を習得することを重視し、高校まで英語とハンガリー語のバイリンガル学校やインターナショナル・スクールに通う子どもが多かった。その後は、インターナショナル・スクールからイギリスの大学に進学しイギリスで就職した者、中国の大学・大学院に進学した者もいるが、ハンガリーの大学の英語コースに進学しハンガリーで就職しようとしている者もいた。また、ハンガリーの公立高校からイギリスの大学を卒業しハンガリーで就職した者もいた。トランスナショナルな進路選択のあり方は、兄弟間でも異なり、親の社会経済的背景や中国系コミュニティ内の口コミ、子どもの国籍や成績等の要因が背後にあり、多様性を生み出していることが明らかになった。

本研究を通して、教育におけるトランスナショナリズムをめぐる問題は、学校への適應・不適應によるホスト国への統合をめぐる問題と複雑に絡み合っていることが明らかになった。EU諸国の移民の子どもの教育やアイデンティティ形成を把握する上では、統合とトランスナショナリズムの両者を視野に入れなければならない点を実証的に明らかにした点に、本研究の意義がある。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

山本須美子(2019)「ハンガリーにおける中国系家族にみる教育戦略」『東洋大学アジア文化研究所年報』53: 116-131(査読無)。

山本須美子(2019)「バルセロナの移民にみるカタルーニャ使用と教育をめぐる現状 中国系移民の場合を中心として」『東洋大学社会学部紀要』56(2): 95-111(査読無)。

山本須美子(2018)「ハンガリーにおける中国系補習校の果たす役割」『白山人類学』21: 157-173(査読有)。

山本須美子(2018)「スペインにおける「新しい」中国系コミュニティの形成と特徴」『東洋大学社会学部紀要』55(2): 17-31(査読無)。

山本須美子(2017)「在日インド系家族の学校選択にみるトランスナショナリズム」『東洋大学アジア文化研究所年報』51: 148-166(査読無)。

山本須美子(2016)「在欧文氏一族にみる宗族のつながりの世代的変容」『東洋大学社会学部紀要』54(1): 21-29(査読無)。

[学会発表](計4件)

山本須美子(2019)「ブタペストにおける中国系の若者にみる学校選択」カーロリ大学日本語学科修士課程講義(招待講演)

山本須美子(2018)「スペインにおける「新しい」中国系コミュニティの形成と特徴」温州大学招待講演

山本須美子(2018)「トランスナショナリズムとシティズンシップ ハンガリーにおける中国系の若者の事例から」静岡県立大学公開連続セミナー「逆流し始めたグローバルゼーション」(招待講演)

Yamamoto Sumiko(2017) 'School Failure among New Chinese Immigrants from Wenzhou in Paris Schools', *International Society of the Study of Overseas Chinese*.

6. 研究組織

(1)研究代表者

山本 須美子(YAMAMOTO Sumiko)

東洋大学・社会学部・教授

研究者番号: 50240099

(1)研究分担者

なし